
お母さん狐の冒険

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

お母さん狐の冒険

【Nコード】

N8026A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

寒い寒い冬の日。子供達があまりにも寒いと言っているのでそれを聞いていたお母さん狐は意を決して子供達の為に手袋を買いに行きます。しかし森も街もトラブルだらけ。お母さん狐は無事子供達に手袋を買ってあげられるでしょうか。童話です。文体はですます調にしてみました。ストーリーは昔のMSXのゲーム『はぐりいふおつくす』をかなりオマージュしています。

第一章

狐の冒険

お母さん

ある森の中でのお話です。この森には狐の一家が住んでおりました。

お父さんが御飯をとってきて、お母さんが子供達の面倒を見る。そうして一家は暮らしていました。

そんな一家の冬のある日のことです。子供達がお家の洞穴の前で前足を磨り合わせながら話していました。

「寒くなつたね」

「そうだね」

子供達は口々に言います。冬なのでもう毛がない足が寒いのです。子供達はそれで困っていたのです。

「手袋があればいいんだけど」

「手袋？」

それを聞いたお母さん狐が洞穴の中から顔を出して尋ねてきました。

「うん、手袋」

子供達はそれに答えます。

「寒いから。前足を覆ってくれる手袋が欲しいなあって」

「お母さん持つてる？」

「そう言われても」

けれどお母さん狐はそれを聞いて困った顔をしました。

「今聞いたばかりだから」

「ないの？」

「ええ」

お母さんは答えました。

「悪いけれど。うちにはないわ」

「そんな」

「じゃあ僕達このまま寒い思いしなくちゃいけないの？」

「葉っぱじゃ駄目かしら」

お母さんは尋ねました。

「それで前足を覆って」

「今冬だからそんな葉っぱはないよ」

けれど子供達は困った顔をしてそれに答えました。

「枯れた枝みたいないな葉っぱばかりで」

「あんなのとてもつけられないわ」

「そうなの。それは困ったわね」

お母さん狐は子供達の言葉を聞いてさらに困った顔になりました。

「お父さんは今揚げを買いに行ってるし」

狐の大好物です。お母さん狐も子供達もこの揚げが好きで好きでたまりません。狐はこれが出て来たら化けていても尻尾を出してしまう位好きなのです。

「それじゃあどうすれば」

「お母さん」

一番年上のお兄さん狐が言いました。

「手袋は町で売ってるよ」

「町で？」

「そう、人間の町で。そこにならあると思うよ」

「町にあるのね」

お母さんはそれを聞いてあることを思いつきました。

「ねえ貴方達」

そして洞穴から出て来て子供達に対して言います。

「暫くおうちで大人しくしてね。お母さん今から町へ行つて来るから」

「手袋飼つて来てくれるの？」

「ええ」

お母さんは答えました。

「お母さんが町まで行って買って来るから。それまでお留守番お願いね」

「うん、わかったわ」

お姉さん狐がそれに頷きました。

「それじゃあ行ってらっしゃい」

「留守番お願いね」

お母さん狐は洞穴を出て買い物に向かうことになりました。子供達に留守番を任せて。その子供達に手袋を買ってあげる為に。

第二章

洞穴から出て少し行くと川がありました。けれどその川には橋があるので安心です。そうだった筈でした。

ところが橋はありませんでした。そこには何もありませんでした。ただ川が広がっているだけでした。

「これは一体……」

お母さん狐はそれを見て呆然としました。いつもある橋がない。これでは渡るには泳がないといけません。お母さん狐は泳ぐのは得意ですが寒いので川なんかで泳いだら風邪をひいてしまいます。子供達が寒くて困っているから手袋を買いに行くのに自分が風邪をひいてしまつては元も子もありません。

「どうしようかしら」

困った顔で辺りを見回します。すると少し離れた場所に石がありました。川の中に石が数個連なっていたのです。

「そうだ、あの石を跳んでいって」

お母さんは思いつきました。

「それで渡ればいいわ。これで濡れないで済むわ」

そして石に近付きました。軽やかな調子で跳んで渡っていきます。こうしてお母さん狐はまずは川を渡りました。しかしそれで終わりではなかったのです。

暫く行くと分かれ道でした。いつも通っている道なのですがここは三つに分かれています。

右と左、そして真ん中に。町へ行くには右に行けばいいのですが何とその道に大きな猪さんが寝転がっているのです。

「あの、猪さん」

お母さん狐はその猪さんに声をかけました。

「どうしたんですか、こんなところで」

「おお、狐の奥さんか」

猪さんはお母さん狐の声に気付いて顔をあげました。

「実はな、困ったことになってしまっただけな」

「困ったこと？」

「うん、悪いものを食べてしまったらしくて。お腹が痛くて動けないんだ」

「お腹が」

「この道を通るんだろう？身体が動いたらどけるんだが」

「それなら」

どうしようか。といってもお母さんは今はお薬なんて持っていません。手袋を買いに行くだけのつもりでしたからお金しか持っていません。なので。

「少し待っていて下さいね」

けれど町に行くにはどうにかするしかありません。猪さんに道を開けてもらうしか。とりあえずは左の道に向かいました。そこは薬草が一杯あって猪さんを助けることが出来るかも知れないと思ったからです。

その薬草が一杯ある場所に来ました。とりあえずどんな薬草がいいのか探します。けれどお母さん狐は薬草にはあまり詳しくはありませんでした。こうしたことはどちらかというとお父さん狐の方が詳しいのです。お父さんは森のお医者さんでもあるからです。

「どれがいいかしら」

何がいいかわかりません。青い草や赤い草、緑の草と一杯あります。そのどれがお腹にいい草なのかよくわからないのです。

お母さんは困ってきました。

「どうしたんですか」

けれどここで兔さんがやって来ました。

「薬草を見て」

「実は」

お母さんは兔さんに事情をお話しました。何でも猪さんのお腹をなおす草を探していると説明したのです。

「お腹の薬ですね」

「はい」

お母さんは答えました。

「どれがいいのでしょうか。私こうしたことにはあまり詳しくなくて」

「それならこの草がいいですよ」

兎さんはそう言って青い草を抜きました。

「この青い草なら。お腹の痛みもすぐになおりますよ」

「本当ですか？」

「私だつて森の医者の人ですから。大丈夫ですよ」

兎さんは笑つてこう答えました。

「さつ、これを持って早く猪さんのところへ行きなさい」

「有り難うございます。何と御礼を申し上げていいか」

「御礼なんていりませんよ。何でしたら今度人参でも」

「わかりました。それじゃあ」

「はい」

こうして兎さんから青い草をもらったお母さん狐は今まで来た道を引き返して猪さんのところに向かいました。そしてまだ苦しんでいた猪さんにその青い草を手渡しました。

「これでいいそうですけれど」

「これを食べれば腹の調子が元に戻るのですな」

「はい」

お母さん狐は答えました。

「是非。お食べ下さい」

「わかりました。それでは」

猪さんはお母さん狐の勧めに従い青い草を食べました。すると今まで苦しかった顔が急に明るくなってきました。

「これは」

「元気になられたんですね」

「ええ」

猪さんは声まで明るくなっていました。

「とても。凄くよく効く薬ですな」

「そうですか。それはよかった」

「有り難うございます、おかげで元気になりました」

「そう言いながら立ち上がります。」

「お邪魔しましたな。ではどうぞ」

「はい」

こうして道が開きました。お母さん狐は右の道を進むことが出来るようになりました。

道を進んで暫く行くと今度は狸さんに会いました。狐さんとは悪友で時には化かしたり化かされたり。仲はいいですが結構喧嘩もしたりします。狐と狸はお互いライバル視していてこの森でもそれは同じなのです。けれど家族ぐるみでのお付き合いもあります。

「あつ、狐の奥様」

見れば狸さんのお家の奥さんでした。お母さん狐とは子供の頃からの付き合いで仲はいいのですがやっぱり互いにライバル視していたりします。お母さんは奥さんの顔を見て少し警戒していました。「どうしたんですか、こんなところで」

「いえ、実は」

それでも互いに知った仲なので挨拶はしました。そして子供達のために町まで手袋を買いに行くということをお話しました。

「手袋をですか」

「はい」

お母さん狐は答えました。

「今から買いに行くんですけれど」

「それなら途中の熊さんに気をつけての方がいいですよ」

「熊さんに？」

「ええ。最近何かソワソワしていて。ちょっと乱暴なところもあって」

「熊さんがですか」

熊さんは森で一番の力持ちです。普段は優しいのですが怒ると怖い人でもあります。

「気をつけてね。いいですわね」

「はい」

お母さん狐はそれに頷きました。そして狸の奥さんと別れてまた道を進みます。

するとすぐにその熊さんと出会ってしまいました。見れば如何にも不機嫌そうです。

「やあ、狐の奥さん」

熊さんはお母さん狐に声をかけてきました。

「どうされたのですかな」

「いえ、これからちょっと町まで」

お母さんは熊さんの大きな身体と不機嫌な様子に戸惑いながらも答えました。

「町までですか」

「はい」

「ではお気をつけて」

熊さんは先に進もうとします。けれどここで熊さんの右の前足の裏が目に入りました。

「あっ」

そこでお母さん狐は気が着きました。どうして熊さんが不機嫌だったのかを。

第三章

「待って下さい」

「どうかしたのですか？」

「ちよつと前足を」

「？」

熊さんはお母さん狐がどうしてそんなことを言うのかわかりませんでした。そんなことを急に言われて余計に不機嫌になりました。

「あの、奥さん」

「待って下さいね」

けれどお母さん狐は熊さんが言うより早くその右の前足に行きました。そしてそこからあるものを取り出しました。

「つつ」

「これでいいですわ」

お母さん狐はそれを取り出して満足そうに言いました。それは一片の木の欠片でした。

「おや」

熊さんはここで気が着きました。

「前足が。もう何とも」

「これが足に刺さっていたんです」

お母さん狐はその欠片を熊さんに見せて説明します。

「足、痛くありませんでしたか？」

「ええ、実は」

熊さんはお母さん狐の問いに答えました。

「やっぱりそうでしたか」

「それでイライラしていたんですよ」

熊さんは言います。見ればその顔もさっきまでとは違いすっきりとしたものでした。

「けれどそれが取れると。何か痛くなくなりましたし」

「よくなりましたか？」

「おかげさまで。どうも有り難うございます」

「いえいえ」

「ところで奥さんは今からどちらへ行かれるのですかな」

熊さんはあらためて尋ねました。

「何処かへ行かれるようですが」

「実は町まで」

お母さん狐は答えました。

「子供達に手袋を買いに」

「手袋をですか」

「はい」

「だったら道は選んだ方がいいですよ」

「道をですか」

「そうです。ここを進んで行けば町へ行く道が二つありますな」

「ええ」

「そのうち右の道は近道ですが今は行かない方がいいですよ」

「何かあるのですか？」

「実は。今あの道に犬がいます」

「犬が」

お母さん狐は犬と聞いて顔を青くさせました。狐は犬が大の苦手なのです。犬と聞いただけで身体が震えて毛が逆立つ程苦手なのです。

「だから。右の道は絶対に使われないことです」

「わかりました」

犬と聞いて行く気にはなれませんでした。お母さん狐はここは熊さんの言葉を素直に聞くことにしました。

「ではそちらは」

「左の道を行かれるといいですよ」

熊さんはまた忠告しました。

「左は今鹿さんがおります」

「鹿さんが」

森の長老で物知りで知られています。鹿さんの言葉は皆から頼りにされているのです。

「だから安心ですぞ。町へは遠回りになりますますが左の道を通りなさい」

「わかりました。どうも有り難うございます」

「棘を抜いてくれた礼ですわ」

熊さんは笑って言いました。

「ですから。御気になされぬよう」

そう言って御礼はいいと言ってくれました。けれど狐さんは熊さんに一言御礼を言ってからその場を後にしました。そして左の道に向かいました。

左の道を行くと熊さんの言葉通り鹿さんがそこにいました。長いお髭を生やして道に立っています。

「あつ、鹿さん」

「おお、狐の奥さん」

お母さん狐は鹿さんがそこにいるのは知っていましたが鹿さんはお母さん狐が来るとは思ってはいませんでした。それで最初に出した声の感じがそれぞれ違っていたのです。

「こんにちは」

「はい、こんにちは」

まずは挨拶を交わしました。

「今日は何処へ行かれるのですかな」

「町まで」

お母さん狐は鹿さんにも正直に答えました。

「子供達に手袋を買ってあげに行くんです」

「そうですね、それはよいことです」

鹿さんはそれを聞いて顔を崩して笑いました。

「もう寒いですからな」

「そうですねですよ。もう子供達も寒い寒いって言っていますよ」

「だからですな。町まで」

「はい」

お母さん狐は頷きました。そして話を続けました。

「それはよいことです。けれど町に行かれるのならば用心して下さい
れ」

「何かあるのですか？」

「はい、どうやら入口で蛇がいるそうなのです」

「何だ、蛇ですか」

けれどお母さん狐はそれを聞いても平気でした。

「蛇だつたら何の心配もいりませんよ」

狐は蛇をよく捕まえるからです。特にお母さん狐はその名人でもあります。蛇なんてちつとも怖くはなかったのです。

「いやいや、ところがこれが普通の蛇ではないのです」

「マムシですか？」

「また違います。大蛇なのです」

「大蛇」

「はい。それはもう呆れる程大きな。それが町の入口で寝そべっているのです。それで皆怖くて引き返しておるのです」

「それはまた」

「行かれるのならば御気をつけ下さい。下手をすればびっくりですからな」

「わかりました。それでは」

そんなに大きな蛇がいると聞いて怖くないと言えば嘘になります。けれどそれでもお母さん狐は行くと決めたのです。鹿さんにお別れを告げるとそのまま町へ向かいました。その時ふと思うことがありました。

「そうだ、蛇なら」

お母さん狐はあることに気付いたのです。

そして町まで行く途中にある酒屋さんに入りました。店主のリスさんが出て来ました。

「御主人のお酒ですか？」

「いえ、町まで行くので」

お母さん狐は言いました。

「買って行こうと」

「町へ行くのにですか？」

「はい」

「それだったら。いらなと思いますけれど」

リスさんはそれが少し不思議でした。けれどお母さん狐はそれでもお酒が欲しいと言いました。

「まあいいですから」

「そりゃ買って下さるんならこっちもお渡ししますけれどね」

お金も出してもらっては売らないわけにはいきませんでした。

「それじゃあ。どうぞ」

「はい」

「途中飲んでその辺りに寝転がったりしないで下さいよ。もう寒いですから」

「それはわかっていますよ」

お母さん狐は笑ってそれに応えました。寒いから子供達の為に手袋を買いに行くのです。それでどうしてそんなことが出来るでしょうか。お母さん狐はだから笑ったのです。

「それじゃあこれを下さい」

「はい」

お母さん狐が買ったのはお店で一番安い量だけが多い焼酎でした。それもとびきり強い焼酎です。お父さん狐も滅多に飲まないような本当に強いお酒です。お母さんはそのお酒を見て満足そうに笑っていました。

「このお酒なら」

お母さん狐には思うところがあったのです。そしてその思いを秘めたまま大蛇がいるという町の入口に向かいました。

町の入口にやって来ました。見れば鹿さんのお話通り大蛇がそこ

に寝そべっていました。

「あの、蛇さん」

「ん！？何か用かい？」

その蛇さんはとても大きな頭をゆっくりとあげてお母さん狐に顔を向けました。

「お渡ししたいものがあるのですけれど」

「私にかい？」

「はい、これです」

お母さん狐はこう言ってさっき買った焼酎を蛇さんの前に出しました。

「これをどうぞ」

「お酒か」

「はい」

見れば蛇さんの目の色が変わっています。実は蛇はお酒が大好きなのです。これは狐が油揚げが大好きなのと同じ位です。本当にこれには目がないのです。

「有り難う、では早速頂くよ」

「ええ」

蛇さんはその場でお酒を飲み干してしまいました。そしてすぐに高いびきをかいて寝てしまったのです。

第四章

「これで大丈夫ね」

お母さん狐は完全に酔い潰れて寝てしまった蛇さんを見て呟きます。それからその横を通り抜けて町へ入って行きます。ようやく町に入ることができました。

町に入るとすぐにお店が見つかりました。お店に入るとお馬さんの店員さんがいました。

「いらっしやい」

顔が長くて愛想のよい店員さんでした。店員さんはお母さん狐に顔を向けて歯を剥き出しにしてにっこりと笑いました。

「手袋を欲しいのですけれど」

お母さん狐はお馬さんの店員さんに言いました。

「いいのがありますか？」

「丁度いいのがありますよ」

お馬さんはそう言って手袋を出して来ました。

「ほら、これなんかどうです？」

「それはちよつと」

けれどお母さん狐はその手袋を見て不満そうでした。見ればその手袋は指が一つしかありませんしおまけにやけに大きいのです。その手袋がお馬さん用なのはもう言うまでもありません。

「狐用はないんですか？」

「おつと、これは失敬」

店員さんはそう言われてはたと気付きました。

「狐用ですね。それでしたら」

店員さんは自分の後ろを振り返って手袋を探します。

「これなんかどうですか？」

「これですか」

見れば黄色い小さな手袋でした。狐の色に合った可愛らしい手袋

です。

「これならどうでしょうかね」

「子供用ですけど」

「ええ、お子さん用のもありますよ。ほら」

お馬さんはそう言っただけで別の手袋も出してきました。見ればその手袋は最初に出したのよりも小さいものでした。二つ並べられるとまるで親子みたいでした。お母さん狐はそれを見て何か温かい気持ちになりました。

「いいですね、この手袋」

「でしょうか？人気あるんですよ」

店員さんはそのつぶらな目を細めて言います。お馬さんの目はとても綺麗なのです。

「今ならセットでお買い得ですし。どうですか」

「わかりました。それでは」

「毎度あり」

こうしてお母さん狐は目出度く子供達の手袋を買うことが出来ました。そして一緒に自分の手袋とお父さんの手袋も買ったのです。

「自分のなんて買うとは思わなかったけれど」

店から出たお母さんは紙袋に入れられた手袋を見て呟きます。

「けれどいいわ。お父さんの手袋も買ったし」

「おや、母さんじゃないかい」

そこで聞き慣れた声が聞こえてきました。

「あら、あなた」

見ればお父さん狐でした。どういうわけかお父さんも町に来ていたのです。

「どうしたの、こんなところで」

「うん、今日は寒いだろう」

お父さんは言いました。

「子供達もそろそろ辛いだろうと思って。それで揚げを買いに行っただけだと思ってマフラーを買いに行っただけだ」

「マフラーを？」

「ほら、これさ」

お父さん狐はそれに応えて自分の首をさします。

見ればそこには赤い大きなマフラーがありました。とても綺麗な、お洒落なマフラーでした。

「皆の分も買ったよ。母さんの分もな」

「いやだわ、お父さんたら」

お母さんはそれを聞いてその細い頬を赤くさせました。

「私は寒いのは平気なのに」

「ははは、けれど悪い気はしないだろう？」

お父さんはそんなお母さんに笑ってこう言いました。

「もらうのは」

「ええ」

お母さん狐はにこりと笑ってそれに頷きました。

「特に。あなたにもらえるかね」

「そう言ってもらえると有り難いな。それじゃあ今着けるかい？」

「今？」

「そろそろ寒くなってきたしね」

お父さん狐はそう言いながら袋からマフラーを出してきました。

それはお父さんが今着けているのと全く同じの赤い大きなマフラーでした。

「これでどうかな」

「同じ赤いマフラーね」

「夫婦だからね。ペアでどうかと思って」

お父さん狐は言いました。

「気に入ってもらえたかな」

「そうね」

お母さん狐はマフラーを首に巻きながら答えます。

「とても温かいし。それにあなたと同じのだし」

「嬉しい？」

「嬉しくなければこんな顔しないでしょ」

お母さん狐はこの時は昔の顔に戻っていました。まだ結婚する前の、お父さん狐がまだお父さんになる前でお母さん狐もまだ娘だった頃の顔に戻っていました。

「知ってる癖に」

そして悪戯っぽく笑ってこう言いました。

「確かにね」

それにはお父さん狐も笑いました。

「子供達のマフラーも同じ色なの？」

「そうだよ」

お父さんは答えました。

「皆の分を買ってあるよ、ちゃんとね」

「そう。それじゃあ私と同じね」

「君も手袋はお揃いなのかい」

「黄色い手袋をね。買ってあげたの」

「子供達に」

「そして私達のを。私達のはついだけけれど」

「やっぱり子供達が第一なのか」

「だってそうじゃない。私達は親なのよ」

もうお母さんの顔に戻っていました。さっきの娘の顔は完全に消えていました。

「子供を第一に考えるのは当然じゃない」

「だから手袋を買いに来たんだね」

「それはあなたもでしょ」

お父さん狐に顔を向けて言いました。

「マフラーを買ったのは。子供達の為でしょ」

「それはね」

やっぱりそうでした。見ればお父さん狐の顔もあの頃の若い時の顔からお父さんの顔になっていました。二人はもう若い顔ではなくなっていました。

「やっぱり子供達が寒いだろうと思ったから」

「そうよね。きっと今でも寒い思いをしているわ」

「じゃあ戻るか、家に」

「すぐにね。じゃあ帰りましょう」

「うん」

二人は手を握り合って家まで帰りました。お母さん狐の子供達の為のささやかな冒険はこうして思いもよらぬ温かい結末で全てを終えたのでした。

お母さん狐の冒険 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8026a/>

お母さん狐の冒険

2009年3月1日14時14分発行